

## 真まっ暗くらな夜よるの証あかし

2010.3.2(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ダニエル書 2章1節から23節

ネブカデネザルの治世ちせいの第二年に、ネブカデネザルは、幾つかの夢ゆめを見、そのため  
に心が騒さわぎ、眠れなかった。そこで王は、呪じゆ法師ほうし、呪じゆ文師もんし、呪じゆ術者じゆつし、カルデヤ人を呼  
び寄せて、王のためにその夢を解き明かすように命じた。彼らが来て王の前に立つと、  
王は彼らに言った。「私は夢を見たが、その夢を解きたくて私の心は騒いでいる。」  
カルデヤ人たちは王に告つげて言った。 アラム語で。 「王よ。永遠えいえんに生きられ  
ますように。どうぞその夢をしもべたちにお話してください。そうすれば、私たちはそ  
の解き明かしをいたしましょう。」王は答えてカルデヤ人たちに言った。「私の言う  
ことにまちがいはない。もし、あなたがたがその夢とその解き明かしとを私に知らせ  
ることができなければ、あなたがたの手足を切り離させ、あなたがたの家を滅ぼして  
ごみの山とさせる。しかし、もし夢と説き明かしとを知らせたら、贈り物と報酬と大  
きな光栄とを私から受けよう。だから、夢と説き明かしとを私に知らせよ。」彼らは  
再び答えて言った。「王よ。しもべたちにその夢をお話してください。そうすれば、解  
き明かしてごらんにいれます。」王は答えて言った。「私には、はっきりわかっている。  
あなたがたは私の言うことにまちがいはないのを見てとって、時をかせごうとし  
ているのだ。もしあなたがたがその夢を私に知らせないなら、あなたがたへの判決は  
ただ一つ。あなたがたは時が移り変わるまで、偽りと欺きのことばを私の前に述べ  
ようと決めてかかっている。だから、どんな夢かを私に話せ。そうすれば、あなたが  
たがその解き明かしを私に示せるかどうか、私にわかるだろう。」カルデヤ人たちは  
王の前に答えて言った。「この地上ちじょうには、王の言われることを示すことのできる者は  
ひとりもありません。どんな偉大な権力のある王でも、このようなことを呪法師や呪  
文師、あるいはカルデヤ人に尋ねたことはかつてありません。王のお尋ねになること  
は、むずかしいことです。肉なる者とその住まいを共にされない神々以外には、それ  
を王の前に示すことのできる者はいません。」王は怒り、大いにたけり狂い、バビロ  
ンの知者をすべて滅ぼせと命じた。この命令が発せられたので、知者たちは殺される  
ことになった。また人々はダニエルとその同僚をも捜して殺そうとした。そのとき、  
ダニエルは、バビロンの知者たちを殺すために出て来た王の侍従長アルヨクに、知慮  
と思慮とをもって応待した。彼は王の全権を受けたアルヨクにこう言った。「どうし  
てそんなにきびしい命令が王から出たのでしょうか。」それで、アルヨクは事の次第を  
ダニエルに知らせた。ダニエルは王のところに行き、王にその解き明かしをするため、  
しばらくの時を与えてくれるように願った。それから、ダニエルは自分の家に帰り、

彼の同僚のハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤにこのことを知らせた。彼らはこの秘密について、天の神のあわれみを請い、ダニエルとその同僚が他のバビロンの知者たちとともに滅ぼされることのないようにと願った。そのとき、夜の幻のうちにこの秘密がダニエルに啓示されたので、ダニエルは天の神をほめたたえた。ダニエルはこう言った。「神の御名はとこしえからとこしえまでほむべきかな。知恵と力は神のもの。神は季節と時を変え、王を廃し、王を立て、知者には知恵を、理性のある者には知識を授けられる。神は、深くて測り知れないことも、隠されていることもあrawし、暗黒にあるものを知り、ご自身に光を宿す。私の先祖の神。私はあなたに感謝し、あなたを賛美します。あなたは私に知恵と力とを賜い、今、私たちがあなたにこいねがったことを私に知らせ、王のことを私たちに知らせてくださいました。」

ダニエル書 2章46節、47節

それで、ネブカデネザル王はひれ伏してダニエルに礼をし、彼に、穀物のささげ物となだめのかおりとをささげるように命じた。王はダニエルに答えて言った。「あなたがこの秘密をあらわすことができたからには、まことにあなたの神は、神々の神、王たちの主、また秘密をあらわす方だ。」

今日も先週に続いて、ダニエルという預言者について、彼の証しについて一緒に考えてみたいと思います。

ダニエルは、妥協せず、人を恐れずに、主に用いていただきたいという切なる願いを持っていたので、主を知らない王でさえも、「このダニエルの神を知りたい」と思うようになりました。そのような思いは、もちろん満たされます。主を知らなかった王は変えられて、

ダニエル書 6章26節、27節

「私は命令する。私の支配する国においてはどこでも、ダニエルの神の前に震えおのけ。この方こそ生ける神。永遠に堅く立つ方。その国は滅びることなく、その主権はいつまでも続く。この方は人を救って解放し、天においても、地においてもしるしと奇蹟を行ない、獅子の力からダニエルを救い出された。」

と。

彼の証しは、もちろん友だちも同じなのです。彼らの証しは、素晴らしい影響を及ぼしたのです。今日は、おもに今読みました2章を読みながら、少し考えたいと思います。

一つの題名をつけようと思えば、「真っ暗な夜のような本当に恵まれない環境で、なお信仰をもって証ししたダニエルとその友だち」とつけることができるでしょう。

私たちの住んでいる世界は、将来どうなっていくのでしょうか。私たちの信仰生活を確かなものとし、動かないようにしっかりと歩むためには、世界の将来を知っておく必要があるのではないのでしょうか。世界の将来を私たちに教えてくれる人はいるのでしょうか。星占

いが教えてくれるのでしょうか。降神術者が教えてくれるのでしょうか。そのほかのいろいろな宗教が教えてくれるのでしょうか。

ある人が、あの有名なアインシュタイン博士に質問したことがありました。(ドイツへ行った人はみな、ウルムへ行ったことがあるのではないのでしょうか。ウルムの教会の塔は161メートル。世界の教会の塔として一番高いものです。アインシュタイン博士は、ウルムで生まれた男です。)「第三次世界戦争はどのような戦争になるのでしょうか」と。

彼は、「第三次世界戦争のことはまだよく分からないが、第四次世界戦争は、原始時代の戦争のように人間は石を投げ合って戦うだろう。それは、次に起こる第三次世界戦争がそれほどひどく、ほとんど世界を破滅に近づける可能性があるからだ」と言ったそうです。

このアインシュタイン博士の言葉は、はたして当たっているのでしょうか。聖書によると当たっていません。第三次世界戦争の時、人類の三分の一が殺されます。想像することができません。三分の一殺されるとは…。けれど、三分の一を殺すための武器は備えられています。ある武器を使うと簡単にできます。しかし、その後、イエス・キリストは公に再臨なさいます。政治家の望んでいる平和の国が始まるのです。

いろいろなことが考えられます。戦争のことを考えている人たちが大勢いますが、誰が正確に将来を告げてくれるのでしょうか。私たちに将来何が起こるか詳しく教えてください。それは、もちろん支配者なる「まことの神」だけです。

ダニエル書 2章28節

「しかし、天に秘密をあらわすひとりの神がおられ、この方が終わりの日に起こることをネブカデネザル王に示されたのです。あなたの夢と、寝床であなたの頭に浮かんだ幻はこれです。」

とあります。ダニエルは一人の預言者です。預言者たちはもちろん主のみこころを伝えただけではなく、将来何と何と何が起こるのかも伝えた人々でした。例えばアモス書の3章7節を見ると、次のような言葉が書き記されています。

アモス書 3章7節

まことに、神である主は、そのはかりごとを、ご自分のしもべ、預言者たちに示さないでは、何事もなさない。

とあります。

主なる神はダニエル書2章を通して、将来何が起こるかを私たちにはっきりと教えておられます。主は、ご自身が世界歴史の支配者であられ、王を立て、王を廃するの、すべてご自身の御手のうちにあることを教えるために、当時の王ネブカデネザルに一つの夢をお見せになりました。

初めに、王はこの夢を人間的な知恵で解き、将来を知ることができると思ったのですが、

それは決してできないことであることをついに悟りました。主なる神がネブカデネザル王にこの夢をお見せになったのは、ネブカデネザル王だけでなく私たちも、世界の将来がどのようにになっていくのか、はっきり知るためにこの夢を与えてくださったのです。

聖書の預言は、将来世界に何が起こるかを告げています。主なる神が与えられた預言を学び、それが預言されてから数百年後、また千年後に、その預言どおりに歴史が成就されていくのを見ると、主の御前に膝をかがめ、礼拝せざるを得ないのではないのでしょうか。

ネブカデネザル王が見た夢は、紀元前六百年からこんにちに至るまでの、いわゆる四つの世界帝国について預言しています。

\* 夢の中で最初に出てくるのが、「金の頭」です。

これは、当時の世界帝国バビロンを表わしています。

ダニエル書 2章32節

「その像は、頭は純金、胸と両腕とは銀、腹とももとは青銅、」

とあります。そして、

ダニエル書 2章37節、38節

「王の王である王さま。天の神はあなたに国と権威と力と光栄とを賜い、また人の子ら、野の獣、空の鳥がどこに住んでいても、これをことごとく治めるようにあなたの手に与えられました。あなたはあの金の頭です。」

\* 二番目。夢の中で次に出てくるのは、「銀の腕と胸」です。

これは、次に続くメディアとペルシヤの国を表わしています。

ダニエル書 2章32節

「その像は、頭は純金、胸と両腕とは銀、」

ダニエル書 2章39節前半

「あなたの後に、あなたより劣るもう一つの国が起こります。」

とあります。

\* 三番目に、夢の中に出てくるのが、「青銅の腹ともも」です。

これは、ギリシャ帝国を表わしています。

ダニエル書 2章32節後半

「腹とももとは青銅、」

ダニエル書 2章39節後半

「次に青銅の第三の国が起って、<sup>ぜんど</sup>全土を<sup>あき</sup>治めるようになります。」

とあります。

\* 四番目。「鉄でできたすね」の夢をみました。

これは、<sup>とういつ</sup>統一されたローマ帝国を表わしています。

ダニエル書 2章33節

「すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。」

ダニエル書 2章40節

「第四の国は鉄のように強い国です。鉄はすべてのものを打ち砕いて粉々にするからです。その国は鉄が打ち砕くように、先の国々を粉々に打ち砕いてしまいます。」

とあります。

紀元476年ローマ帝国は、ドイツ、フランス、イタリア、イギリス、その他の多くの国々に<sup>ぶんれつ</sup>分裂しました。それ以来今日まで、この分かれた国々は、粘土と鉄がよく交じらないように分裂したまま、また<sup>たいりつ</sup>対立したまま続いてきています。

ネブカデネザル王は当時自分の国とその勢力の強さを考え、この自分の国バビロン帝国は永遠に滅びないで続くだろうと考えました。バビロンの周りは、高さ100メートル、<sup>あつ</sup>厚さ27メートル、地下11メートルの二重の<sup>へい</sup>塀で<sup>かこ</sup>囲まれ、その<sup>しゅうい</sup>周囲は96キロ。24里という今でもちょっと想像もつかないような<sup>じょうへき</sup>城壁で<sup>かこ</sup>囲まれていたのです。しかも城壁の間には深い<sup>ほり</sup>堀が掘られており、水が満たされ、<sup>がいてき</sup>外敵から<sup>かんぜん</sup>完全に守られるような<sup>しく</sup>仕組みになっていました。

今このバビロンの王ネブカデネザルは、自分は世界の支配者ではなく、自分の上に主の主、王の王がおられ、やがてバビロンは滅びるとい夢を見ました。<sup>じじつ</sup>事実その通りになってきました。ある夜、<sup>きよだい</sup>巨大な<sup>へい</sup>塀の下を突き抜けて流れているユーフラテス川の水が枯れ、ペルシャとメディアの<sup>ぐんたい</sup>軍隊が城壁の中に<sup>かんらく</sup>忍び込み<sup>かんとく</sup>陥落するとは、<sup>とうてい</sup>到底考えられないことでした。バビロンの町は滅ぼされ、<sup>みごと</sup>聖書の<sup>じょうじゆ</sup>預言は見事に<sup>しゅうじゆ</sup>成就しました。

しかしこの第二の世界帝国メディア、ペルシャも、そんなに長くは続かなかったのです。ギリシャに有名なアレクサンダー大王が<sup>おこ</sup>興り、メディア、ペルシャを5年の間に<sup>せんりよう</sup>占領してしまい、ここでも聖書の預言は確実に成就しました。

このアレクサンダー大王によって打ち建てられたギリシャ帝国も、預言の通りにやがて滅んでいく<sup>うんめい</sup>運命にありました。鉄のように強大なローマ帝国が興り、まもなく全世界を支配するようになりました。

ネブカデネザル大王が見た夢の中には、やがて滅んでゆく四つの世界帝国ばかりでなく、その後永遠に続く国も入っていました。「人手によらず切り出された石」が、像の足を打ち砕いた時、像の全部が砕けて崩れ落ちたという夢も見ました。

ダニエル書 2章34節、35節

「あなたが見ておられるうちに、一つの石が入手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを打ち砕きました。そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金もみな共に砕けて、夏の麦打ち場のもみがらのようになり、風がそれを吹き払って、あとかたもなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土に満ちました。」

と書かれています。黙示録と比べると、よく分かるのではないのでしょうか。黙示録11章を見てみましょう。ダニエル書を読むとき、必ず同時に黙示録も読むべきではないでしょうか。同じ事実について書かれているからです。

ヨハネの黙示録 11章15節から17節

第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」それから、神の御前で自分たちの座に着いている二十四人の長老たちも、地にひれ伏し、神を礼拝して、言った。「万物の支配者、常にいまし、昔います神である主。あなたが、その偉大な力を働かせて、王となられたことを感謝します。」

夢を考えていきますと、世界歴史はだんだん良いほうに向かっていってはいません。徐々に世界の状態は悪くなってきています。初めは金であり、終わりは粘土となり、やがて滅んでしまうことがよく分かります。分裂して弱くなってしまいます。頭、胸、両手、両足、胴、みなばらばらになってしまいます。十本の足の指もばらばらになっていきます。

黙示録には、「十の角」について書かれています。これはみな同じ意味です。

ヨハネの黙示録 17章8節

「あなたの見た獣は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上って来ます。そして彼は、ついには滅びます。地上に住む者たちで、世の初めからいのちの書に名を書きしるされていない者は、その獣が、昔はいたが、今はおらず、やがて現われるのを見て驚きます。」

そして、

ヨハネの黙示録 17章12節、13節

「あなたが見た十本の角は、十人の王たちで、彼らは、まだ国を受けてはいませんが、獣とともに、一時だけ王の権威を受けます。この者どもは心を一つにしており、自分たちの力と権威とをその獣に与えます。」

とあります。この獣とは、言うまでもなく、将来現われる反キリストです。

ダニエル書 2 章に書かれている「人の手によらずに切り出された石」は、やがて雲に乗って来られる、ご自身の御国をお造りになられる「主イエス様」を表わしているのです。

今の世界情勢がだんだん良くなって神の国になる、と聖書は語っていません。一度破壊され、上から新しい主なる神の国が地上に置かれる、と聖書は語っています。

ダニエル書に戻りまして、7 章から 2 節を読みます。

ダニエル書 7 章 1 3 節、1 4 節

「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」

イエス様も同じ事実について言われました。

マタイの福音書 24 章 30 節

「そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。」

世界が将来どうなっていくか預言できる人間は誰もいません。また、預言してもそれが実現しないのを恐れて、誰も預言する者はいません。他の宗教と名のつくどれを見ても、世界の将来を預言している宗教はありません。しかし、「まことの神」は、聖書を通して世界の将来をはっきりと預言されました。それまで聖書とまことの主なる神を信じるのでできなかったある人も、このダニエル書の預言とその成就を聞かされ、砕かれて、イエス様の前に悔い改めて信じるようになった、という実例があります。

比較してみましょう。即ち、バビロンにおけるダニエルとその友だち、それから、今の時代と私たちを比較してみたいと思います。

ダニエルとその友だちはどういう人たちであったかと言いますと、信仰の人たちでした。ヘブル人への手紙 11 章に、信仰の人たちがたくさん書かれています。その中に彼らの名は記されていませんが、33 節、34 節を読むと、ダニエルとその友だちも含まれていることが分かります。

ヘブル人への手紙 11 章 33 節、34 節

彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。

と記されています。

ダニエル書で最も言わんとされていることは、「暗闇くらやみの中での信仰」ではないかと考えられます。私たちは、もうすぐイエス様がお出でになろうとしている末の世に、最暗黒さいあんこくの世に生きていることは、疑うたがいもない事実です。ですから、私たちの生きているこの世は、ダニエルの生きた頃ころに比べることができるのではないのでしょうか。いわゆる霊れい的な原則げんそくは、どの時代においても全く同じです。御霊みたまがお働きになって、私たちがダニエルやその友たちと同じ信仰の人となることができるなら、本当に幸いと思います。

多くの人は、世界は徐々に良くなるのだろうか、だんだん悪くなっているのだろうかと考えます。その両方だと思うのです。良いところはだんだん良くなり、悪いところはだんだん悪くなっています。

イエス様はご自分の教会を建て上げるために働いておられ、ご自分に属ぞくする人々を完全な者とするために、いろいろな苦しみや、悲しみ、困難こんなんを通して、練ねり、清きよめ、ご自分の形に似せようとしておいでになります。これはだんだん良くなる面です。これと反対に、サタンからのものは、ますます悪くなる一方いっぽうです。

主なる神のみこころは、ご自身に属する者、主の恵みによってみ救いにあずかるようになった者に、傾かたむき尽くされています。ダニエル書7章を読むと、この中に「聖徒せいと」という言葉が六回も出てきます。主なる神がどんなにご自分に属する者を思っておられるかが書かれています。

良いところはますます良くなり、全まったきに向かっています。救われた者は成長せいちょうし、「神の国せいじよく」は成熟せいじよくしています。悪い面も、ますます悪くなり、「悪」の完成に向かっています。良い面も悪い面も、すべての出来事ちゅうしんの中心にイエス様の「からだなる教会」があります。

そして良い面も悪い面もあらゆる出来事は、主のものとなった者が、主の御形みかたちに似る助けをしているのです。主のご栄光と主のご目的は、すべて「イエス様のからだなる教会」に委ねられています。全天全地ぜんてんぜんち、地獄じごくまでが、救われた者が御子主イエス様の御姿みすがたに変えられる助けをしているのです。

いくつかの事例じつれいを見てみましょう。

・サムエルの母ハンナは、非常に悩んだ者でした。サムエル記1章10節を見ると、次のように書かれています。

サムエル記・第一 1章10節

**ハンナの心は痛いたんでいた。彼女は主に祈いのちって、激はげしく泣いた。**

確かに彼女は苦しみました、あきらめなかったのです。彼女はすべてを主に委ね、祈りました。これこそ勝利しょうりの秘訣ひけつです。主のみもとに行く者は捨すてられません。その人は主

の偉大な解放を経験します。

・旧約聖書の中で、ひとりのやもめについて書き記されています。

このやもめの唯一の喜びだった息子が亡くなったのです。彼女がいかにか苦しんだかは、想像できないでしょう。彼女はエリシャという預言者のところへ行って、自分の悩みを打ち明けました。預言者は、この苦しみ悩んでいるやもめをもはや見ることができないほどでした。その時、預言者はいろいろな慰めの言葉をかけようとはしなかったのです。

列王記・第二 4章33節

**エリシャは中にはいり、戸をしめて、ふたりだけになって、主に祈った。**

その結果、主は死んだ子どもを生き返らせ、栄光を現わしてくださいました。私たちが苦しい状態に置かれ試練にあうとき、祈ることこそ勝利の秘訣です。

・昔、ヒゼキヤ王はある時、一通のおもしろくない、驚くべきひどい手紙を受け取りました。しかし、彼はそのことを怒ったり、不満を言ったりしませんでした。またその手紙を公に見せたり、愚痴を言ったりもしませんでした。王は何をしたのでしょうか。

イザヤ書 37章14節

**ヒゼキヤは、使者の手からその手紙を受け取り、それを読み、主の宮に上って行って、それを主の前に広げた。**

主に至る戸は、いつも開かれています。主は、私たちが私たちの問題と悩みをもって主のみもとに行き、主に信頼することを待っておられます。主は奇蹟を行なうお方です。主にとって不可能なことは一つもありません。

・主に大変忠実に仕えたダニエルは、絶望的な状態に置かれたことがありました。

彼の敵対者たちは王に懇願し、一箇月間、王ではなく神に願い求める者はみな、獅子の穴に投げ込まれるべきである、という変えることのできない法律を発令するように迫りました。その時ダニエルは、何をしたのでしょうか。怒って王のところに行ったのでしょうか。敵の卑劣なやり方に対して怒ったのでしょうか。ダニエルは大勢の友だちを呼び集めて、逃れ道を求めたのでしょうか。そのうちの何一つ、彼はしなかったのです。ダニエル書6章10節。先週読みました箇所です。

ダニエル書 6章10節

**ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。**

祈っただけではなく、「感謝していた」のです。ダニエルは法律によって許されていな

いことをしてしまったのですが、その時、彼は主に叫び、祈り、すべてを主に委ねました。彼は意識的にすべての事がらを主の前に申し述べました。彼は、主が必ずみわざを成して下さると確信していました。このような信頼は決して決して失望させられることはありません。不可能と思われたことが起こったのです。即ち、獅子はダニエルにあえて触れようとはしませんでした。信じられないようなことですが、本当でした。私たちの主は生きておられます。主は、主に避けどころを求める人たちの人生において、主が全能者であられることを現わしてください。

・無実の罪で牢獄に入れられたパウロとシラスも、同じ態度をとりました。

彼らは鞭打たれ、凶悪犯罪者のように取り扱われましたが、彼らは決して反抗的な態度をとりませんでした。また彼らは、「なぜ主はそんなことを許しておられるのか」とも思わなかったのです。「私たちは主にだけ仕えたのに、許しがたい暴挙ではないか」とも言いませんでした。使徒行伝 16 章 25 節を見ると書かれています。

使徒の働き 16 章 25 節前半

真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、

「真夜中ごろ」、一番暗い時です。彼らは、なぜそのように導かれたのか理解できなかったでしょう。しかし主は決して間違いをなさいません。このような導きも私たちにとって最善の益となるに違いないということを確認したのです。ですから、彼らは祈りつつ賛美の歌を歌うことができたのです。

イスラエルの民は、本来主の御栄えを現わし、主の権威を証ししていかなければならぬ人たちがたつたはずなのですが、ダニエルの時代のイスラエルの民は、そのことからおよそかけ離れた状態に陥っていました。当時のイスラエルの民は、主のご支配を証しするどころか、敵の手に渡り、捕らわれの身となって、バビロン、外国まで移されていました。

かつてのイスラエルの民は、主に従順であった時、世界歴史の中心に置かれ、他の民はみなイスラエルの神の前に膝をかがめたものでした。しかし、ダニエルの頃のイスラエルの民は、力がなく、喜びがなく、権威もありませんでした。隣れにも捕らえられバビロンに移されていました。主のご支配からはずされたイスラエルの民は、この世の国バビロンによらなければ食べることも、着ることも、住むこともできない捕らわれの身となってしまいました。

こんにちにおいても、同じではないでしょうか。即ち、主によって救われた私たちは、国々の中で権威を持っているのでしょうか。主のご支配が私たちの真ん中に、さやかに現われているのでしょうか。私たちは、悪魔の憎しみを感じるのでしょうか。戦っているのでしょうか。

エペソ書の 6 章、よく読む箇所です。

エペソ人への手紙 6章12節

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

私たちの戦いは、目に見える世界、人間に対するものではありません。

エペソ人への手紙 3章10節

これは、今、天にある支配と権威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、

とあります。

こんにちの教会の証しは弱くなっています。ゼロに近いものになってしまったのです。教会を通して主のご支配が現わされるよりも、教会はこの「目に見える世界」によって、支配されていないでしょうか。私たちが、御霊によって妥協することのない主のご支配のもとにある証し人となることができれば、本当に幸いです。

悪魔についての箇所を読みます。

ヤコブの手紙 4章7節

悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。

「悪魔に立ち向かいなさい」、これは信じる者にしかできません。当然です。悪魔は、あなたがた信じる者から逃げ去ります。

エペソ人への手紙 5章11節

実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出さない。

コリント人への手紙・第二 2章11節

これは、私たちがサタンに欺かれたいけません。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。

ペテロの手紙・第一 5章8節、9節前半

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのよう、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。

と記されています。

了